

## 四日市市の空襲記憶

私は昭和20年3月学徒動員解除になり、4月に〇〇産業四日市工場（公害問題で有名な）に就職しました。仕事に慣れた時分の6月に陸軍省（今の自衛隊の様なもの）が国土防衛隊と言う部隊を作り、17歳から50歳位迄の男子を赤紙1枚で召集しました。部隊名は東海31504部隊、当時の四日市商工学校の空き校舎が部隊本部でした。（学生は全員学徒動員で学校は休校中）150人から200人ぐらいの部隊だったと記憶しています。津の連隊から現役の兵隊が4名ぐらい、長は確か陸軍中尉だったかな？6月の10日頃に入隊し18日の夜中に不寝番に当たり、ごぼう剣だけ腰につけ兵舎内いや校舎内をうろうろ（軍隊用語で動哨）しておりました。毎晩の様に警戒警報は出ておりました。その時ブルンブルンと言うB29の爆音が聞こえたので、すぐ衛兵指令所（詰所）に「空襲！」と報告したのですが、誰も信じてくれず、反対に「空襲警報が発令されていないのに不要な事を言うな」と上官に叱られました。私は3月13日の大阪空襲を体験し、堺、西宮、神戸の空襲も見ておりますので「あの爆音はB29に間違い在りません」と言っている最中に夜空が昼の様に明るくなり照明弾が四日市の街を取り囲むように落とされ、続いてその囲いの中へ焼夷弾が花火の様に、いや雨の様に降り注ぎました。上官や古参兵は初めての事なのでうろろしながら我先に逃げ出し、私は銃と奉公袋、着替え袋を持って校庭の隅に造られている簡単な防空壕に避難、いや逃げました。校舎も焼夷弾の直撃を受け、脆くも全焼、校庭には焼夷弾の燃えカスがごろごろ、夜が明けると焼けた市内から兵隊の嫁さん、親、子供達が続々と学校の門のところへ詰めかけました。まともな格好をした人は一人もおりません。皆寝間着姿か、下着姿で真っ黒な顔、焼けた髪、下駄か草履履き姿で、「おとうちゃん家焼けた、あの人が焼け死んだ、家の子が居てない、どないしよう。」と、兵隊は門の外へ出れません。柵ごしに「ああしろ、こうしろ」と言うのが精一杯。幸いにも兵隊は死傷者無し、昼過ぎに大八車に焼け残った食料を積み天理教の詰所に寄って米の俵詰めを貰い、焼けなかった町外れの国民学校（今の小学校）へ移動しました。途中で黒こげの死体、手足の千切れた人（勿論死人）数多く見ました。けれども、どうすることも出来ずに学校に着き、夕方になって部隊長が一時帰郷を発表しそれぞれの家に帰りました。尾上町にあった〇〇の寮は幸いにも焼けずに残っていました。しばらく会社に出て7月にまた部隊に戻りました（日時忘却）。それからが大変でしたが、又の機会に思い出すままにお話ししましょう。空襲の日の夕方に何故一時除隊になったのか？兵舎は小学校を借りる事が出来ましたが、寝具布団蚊帳類が全部焼けてなくなり軍は国防婦人会にそれらの調達を命じました。兵隊は家、家族の安否を確かめるため除隊です。と同時に武器の調達です。何故ならば銃も持たずに避難した兵隊が多くおりました。私達会社には青年学校なるものが有り、そこには軍事教練の為の三八式歩兵銃、銃剣、軽機関銃等がかなり銃器庫に並んでいました。一般の召集兵は軍の弾の出ない教練銃を支給されていました。私も会社の青年学校に借用書の更新をして7月はじめに銃剣、食器のドンブリ碗2ケと箸箱、着替え、

歩兵操典“ドンブリは万古焼”。寮の食器はすべて四日市名産の万古焼でした。それらを奉公袋に詰め込んで、また東海31504部隊に帰りました。

帰隊してからの訓練が、がらりと変わりました。現代の言うところ自爆訓練です。まず坂の上から年配の兵隊2名で大八車を引っ張り下ってきます。私達は長さ3米程の竹竿の先に10センチ角×長さ30センチ位の角材を取り付けたものを手に持って道端の窪みに潜み、下って来た大八車の下に差し込みます。直ぐに反転、退避すれば教官が大声で「成功」。又、野球のベースの様なものを両手に持って大八車の上に乗せて反転、退避、これまた教官が「成功」、乗らない時は「不成功」やり直して出来る迄しごかれました。

大八車は何か？それはアメリカ軍のM4戦車に見立てての訓練なのですが、近づくまでに撃たれて死んでしまうでしょうね。竹竿の先に括り付けた物は“刺突爆雷”と言われベース状の物は“フトン爆雷”と呼ばれていました。とにかく死の訓練だなと私は思っていました。

ある日の夕食時に部隊長命令があり、「本日20時完全武装して兵舎前に集合、但し銃は音のしない様に紐、ポロキレで巻いておくように、そして着剣出来るように」と指示がありました。20時に集合すると、やおら部隊長「敵アメリカの上陸部隊が四日市港に潜入せり、我部隊はこれを殲滅せんとする」出動前へ進めの号令があり、兵隊達は着剣した銃を持って焼けて何も無い街を東へ港の方へ時々匍匐前進を交えて進みました。丁度野菜畑の中で小休止。勿論身体はうつ伏しのまま、目の前に大きなナスとキュウリ「いただきます！」がぶりと食べたキュウリの美味かったこと・・・「お百姓さん御免やで」は胸の内。夜中過ぎに状況終了、帰りは立って歩いて帰隊しました。

## 昭和20年8月15日の後

私が1945年4月に就職した会社、〇〇産業四日市工場には連合軍の捕虜収容所がありました。工場の南側の正門外にあり、東側はすぐ伊勢湾の海で、西側はかなり広い原っぱになっていました。捕虜の人数は100人位だったでしょうか？南方フィリピンで日本軍の捕虜になったオーストラリア（豪州兵）が多く居た様でした。収容所の建物は木造平屋建てで3棟在った様に記憶しています。内大きな建物の屋根には白いペンキでローマ字で何か記号が書いてあったように記憶しております。彼ら捕虜達は昼は日本の工員（労働者）と同じ様に真っ黒になって働いていました。但し作業は製品等の運搬作業でした。朝夕の出退時の正門を通る時捕虜監視員が大声で「歩調取れ」と号令を掛けますが捕虜達は足が上がりません。すると監視員が長い竹の鞭で後ろから「足あげんか」と頭をコツンと叩きます。彼等は知らん顔をしてゾロゾロと門を通過します。

最近になって知ったことなんですが、我々アジアの農耕民族は米作りの第一段階として泥田のなかに足を入れないと耕しも田植えも草抜きも出来ませんし、移動するときも足を上に抜かないと位置を変える事ができません。それが何百年も継続された民族の日常生活のなかに狩猟遊牧民族と異なるDNAが働いてあの春、夏の甲子園の高校球児の様に私達の足は上がるのかな？と私は思っております。

戦後GHQのMPがB・C級戦犯検挙でジープでやってきて何人かの監視員が捕虜虐待の嫌疑で東京巣鴨プリズンにおくられたと風の噂に聞いております。

当時私達の職場（精金室）の隣の銅精錬電解槽工場に若い捕虜が5、6人働いておりました。勿論体は私より大きく（痩せておりましたが）歳も上でした。彼等は出退時には何時もカンズメの空き缶を腰に下げていました。私達が残業すると産報（産業報国会）より食事（めし）の特別配給がありました。仕事に使っている磁器製の大きな蒸発皿を持って食堂に行くと麦飯ですが山盛り一杯くれました。一人では食べきれませんので始めに捕虜2、3人に分けてやりました。上司にみつかれば大変ですが一度もばれませんでした。

8月15日に終戦になり間もなくアメリカのグラマンF4Fの5、6機の編隊超低空で飛来し腹に取り付けていたドラム缶を捕虜収容所前の広場に何回か落としました。

グラマンは翼を何回も振って南の方へ消えました。すると収容所の中から捕虜達が大八車やリヤカーの様な運搬車を持って来てワアーワアー叫んで積んで帰りました。

明るく日からが大変でした。新品のGI帽、士官帽、折り目のついた服、コートバンのぴかぴかの靴、ひげそりの痕も青い元捕虜の兵隊、下士官達が足どりも軽やかに三々五々会社の門に入って来ました。変なアクセントで「歩調取れ、かしらみぎ！」とやりました。慌てたのは何時も怖い顔で勤務している守衛さん。直立不動で答礼をしておりました。

其の、元捕虜達は8.15迄は近づく事も出来なかった工場事務所へ胸を張って入って来ました。私達社員には偉そうな課長達は、元捕虜達に「ヘイユウカチョサンシガレットサブビス」なんて言われて、口にしたこともないキャメルやラッキーストライクやチェスターフィールドなど振る舞われ、ペコペコとしてヘラヘラ笑っていました。

私を見つけた顔見知りの捕虜は「ヘイ・ボウイ・プリイズカムヒヤ」と呼んで「プレゼントサブビス」と言ってチョコレート・ガムを両手一杯山盛りにしてズボンのポケットに20本入りの煙草を2つも3つもねじ込みました。名前も聞いた事もない煙草もありました。9月に入って、春に採用された私達新入りは、予備役を命ずの一枚の紙切れで寮待機になりました。内外地の軍隊からの復員技術者や中国海南島他南方方面からの帰国技術者の為に駆出しの若者は足止めになりました。・・・とゆうことでしょうか。

其れまでは本給35円プラス手当て15円。計50円の月給で寮費10円、残りが貯金と生活費でしたが、9月からは手当て無し、寮は昼食無し・・・米の無い時代で代用食を御在所岳の麓の湯の山温泉、菰野辺までサツマイモの買い出しに行きました。

副食は寮の東側の港の着船場辺りで、アナゴ、腰まで水に浸かりながらキス、ハゼを釣り、七輪（カンテキ）で焼いておかずにしていました。少しの預金も直ぐに底が見えてきましたので12月に大阪池田に帰ってきました。

明けて1946年1月に奇しき御縁で住友化学春日出工場に就職し、私の戦後の人生が始まりました。それから60うん年、永い様でアツと言う間の人生でした。ただ自慢出来るのは配管設備屋の商いをしておりましたが人様を泣かせて金儲けをしたことは一度もありませんでした。80有余年の出来事を纏めたら1冊の本になるかと思いましたが如何せんちょっと手遅れの様です。（2012.12.8記）